

# ちょうど真ん中の海、中庸の海 ホセ・デ・カダルソ『モロッコ人の手紙』における地中海

富田 広樹  
(文学部比較文化学科)

## キーワード

ホセ・デ・カダルソ、『モロッコ人の手紙』、地中海、対話

## 要 旨

本稿では、ホセ・デ・カダルソの書簡体小説『モロッコ人の手紙』におけるスペイン人ヌーニョ・ヌーニェスとモロッコ人ベン・ベレイの対話を考察する。異邦人の目を借りた結構を有する先行作品群からの乖離と、カダルソが追求した批評のありかたを検討するとともに、スペインとモロッコのあいだに横たわる地中海がひとたびは歩み寄る二者の間で中庸の理想を語り合う場であったことを、執筆同時代の歴史的背景より明らかにする。

## 1. はじめに

ピレネーの山々をべつにすれば、四囲を海の波に洗われているイベリア半島にあって、その歴史の歩みも人々のいとなみも、海という存在から切り離して考えることはできない。世界史上の画期となったコロンブスによるアメリカ大陸到達以前より、スペインやポルトガルの船はアフリカ沿岸部を南下する形で大西洋に進出していたが、航海の規模と重要性においては地中海のそれが勝っていた。旧約聖書中に現在のスペインにあたると思しい土地の名があらわれるのも、まずは地中海とともになのである。

ソロモン王が飲み物に用いる器はみな金であった。レバノンの森の宮殿にあった器ものもすべて純金であって、銀の物はなかった。銀はソロモンの時代には、価値あるものとはみなされていなかった。

王は海に、ヒラムの船団のほか、タルシシュの船団を持っており、三年に一度、タルシシュの船団が金、銀、象牙、さる、くじゃくを運んで来たからである<sup>1</sup>。

ここに挙げられたタルシシュは、のちにヘロドトスが『歴史』第一卷一六三章で、遠洋航海の先駆者フォーチャ人が「イベリア半島のタルテソスまで海路をひらいた」と記しているものとおなじと考えてよいだろう。聖書世界、あるいはギリシアから見てイベリア半島は地中海の果てにあった。

日の没する方角にあることからエリュティア、すなわち赤い島と呼ばれる架空の島で、ヘラクレスは十番目の偉業を達成した。これがスペインの方角と思われるのだが、トマス・ブルフィンチの *The Age of Fable* を野上弥生子のチャーミングな訳で引こう。

今一つの仕事は、ゲリュオネスの牛をエウリュステウスのところへ持って帰ることでありました。ゲリュオネスというのは身体<sup>からだ</sup>の三つある怪物で、紅の島<sup>くれない</sup>に住んでいました。その島が、落日の光線の下なる西の果てに横たわっているため生じた名でありました。この描写によると、今のスペインに当たるように思われます。ゲリュオネスはその王でありました。ヘラクレスはいろんな国々を旅行した後で、ついにリビア（アフリカの北部）とヨーロッパの国境に達しました。そこで彼は巡歴の記念碑として、カルペとアビラという二つの山を起しました。他の記録によると、一つの山を二つに裂いて、両側に半分裂き残したのがジブラルタルの海峡で、その二つの山はヘラクレスの柱と呼ばれていたとしてあります<sup>2</sup>。

巡歴の記念碑は異説では柱とされ、ヘラクレスの柱がジブラルタル海峡の異名となる。コロンプスの航海以降、アメリカ大陸の財宝をもとめて地中海の外洋に数多の船が出ていくことになるが、それ以前はジブラルタル海峡こそが地中海の終着点であった。したがって、イベリア半島に位置した国々にとって長らくのあいだ、目を向けるべきは東方の地中海であった。のちにカスティーリャ王国と同君連合を成すアラゴン連合王国は、イベリア半島内の領土拡大に限界が見えると海洋覇権国家としての道をめざし、イタリア半島内部をはじめとして海の彼方におおくの領土を得た。アラゴン王アルフォンソ五世はナポリに宮廷を遷<sup>うつ</sup>して統治をおこなってさえいる。

<sup>1</sup> 「列王記 I」『聖書 新改訳』日本聖書刊行会、一九七〇年、五四九頁。

<sup>2</sup> ブルフィンチ『ギリシア・ローマ神話 付録インド・北欧神話』野上弥生子訳、岩波文庫、一九七八年、一九八頁。

時代はくだって一八世紀のはじめ、スペイン継承戦争の帰結としてブルボン朝スペインはその地中海領土の割譲を余儀なくされるが、一七三四年にナポリを回復すると、ブルボン朝最初の王であるフェリペ五世とその二番目の妃イサベル・ファルネシオとのあいだに生まれた第二王子カルロスがナポリ王カルロ七世として即位する。ナポリのプレビシート広場に面する王宮には歴代の王の彫像がならんでいるが、そのなかで狩猟服に身を包んだ彼の台座にカルロ三世と刻まれているのは、四半世紀にわたったナポリ統治のあとで彼がスペイン王カルロス三世として即位したからにほかならない。このように、地中海を挟んでスペイン王家の権勢はイベリア半島と南イタリアに及んでいたのであり（それはかつてのアラゴン連合王国の海外拡張政策の名残である）、媒介<sup>メディア</sup>としての海という存在を考慮せずにヨーロッパの各国史を考えることには、あまり意味がない。かつてそれらの「国」が存在しなかったのであれば、なおのことである（「スペイン」の場合、それは地名であり、またそこに併存した王国群を指した）。



ナポリのプレビシート広場に面する王宮に置かれたカルロ七世像（著者撮影）

いっぽうの南方、ジブラルタル海峡は一八六九年のスエズ運河開通まで地中海と外海をつなぐ唯一の交通路であったことから、歴史をつうじて要衝であったことは言うまでもないが、狭いところでわずか一四キロメートル先、アフリカ側の対岸には、キリスト教徒からみて異教徒にあたるイスラム教徒の存在がつねに脅威としてあった。イベリア半島における西ゴート王国崩壊の引き金のひとつとして八世紀はじめのイスラム教徒の侵攻があり、敗走したキリスト教勢力がおよそ八〇〇年ののちにイスラム教徒のグラナダ王国を陥落させて国土再征服<sup>レコンキスタ</sup>を完遂したのは、コロンブスがアメリカ大陸に到達したのとおなじ一四九二年のこと。そもそも、ジブラルタルの名は半島に上陸したイスラム教徒の武人ターリク・イブン・ズィヤードに由来する（ターリクの山の意）。

より視野を広くとるならば、ゲルマン民族の侵入によってもたらされたローマ世界の断片化と同様の重大さでもって、イスラムによる地中海南岸の支配を考える必要がある。哲学者フリアン・マリアスの言葉を引こう。

ローマ世界の断片化が、五世紀における侵入の最も重大なる帰結である。地中海の統一に亀裂が出来たということは八世紀初頭における大変な出来事なのだ。今一度また歴史が、自然を変えることのないまま、地理を変貌せしめる。すべては依然として同じままである。陸も海も。だが人間の生の舞台は深甚なる異変に見舞われる。〔中略〕御想像にもなっていたきたい。延長線上にはスペインとシチーリアが控える地中海の南岸がイスラムに占領されたということが何を意味したかを。もはやわれわれの海ではなく、我々の（Nostrum）海と汝らの（Vestrum）海に（これは対話があつてのことだが）、いや大抵の時代には彼〔ら〕の（Suum）海になってしまうその分割が意味したところを<sup>3</sup>。

かつてのローマ世界が地中海の南北両岸に広がっていたとするならば、南岸がイスラム教徒に支配されたときに「われわれの海 *Mare Nostrum*」であった地中海は「われわれと汝らの海 *Mare Nostrum et Vestrum*」となったのであり、対話を欠くおおくの場合には「彼らの海 *Mare Suum*」であった。イスラム勢力がイベリア半島に達するに及んで、地中海世界の統一に生じた亀裂は、決定的なものとなった。

ジブラルタル海峡がわずかな距離をあいだに挟んで対立する二者を隔てていたとするならば、ときにそれは敵意に満ち満ちた海であったかもしれない。歴史をつうじて双方向的に侵略や略奪は繰り返されてきたのであり、帝国主義の時代にはスペインにかぎらずフランスやド

<sup>3</sup> マリアス、フリアン『裸眼のスペイン』西澤龍生、竹田篤司訳、論創社、一九九二年、一二八—一二九頁。

イツ、イギリスといった欧州の列強が拏<sup>と</sup>って北アフリカを収奪した。その痕跡は今日もお鮮明に残っている。現在、スペインはセウタとメリリヤの自治都市をアフリカ北岸に有する。モロッコが領有権を主張しているが、スペイン政府はこれに応じてはいない。

しかし一八世紀のある時点で、ジブラルタル海峡は相互の理解のために二者が歩み寄る対話の海となったことがある。ちょうど真ん中の海が、極端への偏向を嫌う中庸の理想を展開するための海となったのである。

## 2. モンテスキューに抗して

かつてフェニキア人が植民都市ガディールを築いたのは今日カディスとして知られる半島の都市だが、一七四一年にこの街で生を享けた作家ホセ・デ・カダルソは、小説作品、詩、戯曲をいくつか残して、一七八二年軍人としておもむいたジブラルタル包囲戦で命を落とした。わずか四〇年あまりの生涯ではあるが、その作品『モロッコ人の手紙』と『鬱夜』はスペイン文学史に特異な位置を占めている。後者についてはそのロマン主義的性格の顕著なるがゆえだが、前者については作品に横溢する批評意識の鋭敏さ、それも批評の方法に複数の視線を交差させることによって客観性を追求したことにあろう。奇しくもこれらふたつの作品は作者の死後、定期刊行物紙上で公にされたものであってみれば、生前のカダルソがこれらに由来する文学的名声を享受することはついになかった。

『モロッコ人の手紙』は、その標題からして隣国フランスにおいてモンテスキューが著した書簡体小説『ペルシア人の手紙』を彷彿とさせ、これを模倣した作品と誤解する向きがおおいが、じっさいにはフランスの大法官の作品に対するアンチテーゼとなっている作品である。正確な執筆年代は知られていないものの、ゆうに一〇年を超える期間を執筆と出版の準備に賭したとみられるこの作品を、カダルソ畢生の作と呼ぶことに異論はないだろう。興味深いのは、作家の現在までに知られるもっとも古い作品にしてからが、『法の精神』の著者としてすでに令名を馳せ一大権威ともなっていたモンテスキューの『ペルシア人の手紙』に対する痛烈な批判文書であったことである（こちらも作者の生前に日の目を見ることはなく、一九七〇年にフランス人研究者ギ・メルカディエが発見し、出版された）。この作品は『モンテスキューのペルシア人の手紙七八番に対するスペイン・ネイションの擁護』と題され、取り上げられた書簡の一文一文にスペイン語の翻訳を付して反駁を行っているのである。

この『擁護』という作品の執筆年代は正確にはわからない。そこで言及される書誌のもっとも新しいものはヴォルテールの一七六八年の作品『四〇エキュの男』であるが、それに先立ってすでに草稿として準備されていたとすれば、可能性としてカダルソがフランスからスペイン

に帰国した直後の一七五八年からの時代を想定に入れてもよい。作者がみずからの経歴を述べる箇所「かの美しい国に育ち (Me he criado en su hermoso país)<sup>4</sup>」という一文が現在完了形で書かれていることも見逃してはならないだろう。

カダルソは九歳（一七五〇年）の時にフランスの名門、ルイ・ル・グラン校（Collège Louis-le-Grand）に入学する。イエズス会によって運営されていた学校で、当時おおくの貴族の師弟が学ぶエリート教育機関であった。同校からはモリエールやヴォルテール、ドニ・ディドロなど数々のアカデミー会員が輩出した。一三歳（一七五四年）で息子をパリに訪ねた父親と会い、カダルソは父の意向にしたがってロンドンへ移った。一七五七年にパリの学校へ戻り、翌年スペインに帰国している。マドリードでは、おなじくイエズス会が運営する王立貴族学院（Real Seminario de Nobles）に入学している。一七六〇年に学院を出てカディスへ戻り、一七六二年に父がコペンハーゲンで客死するまで、ヨーロッパを旅行する。父の死を受けて帰国した彼は、ボルボン騎士団に入団し、軍人としての道を歩み始める。こうしてみると、『ペルシア人の手紙』のスペイン語訳がファン・デ・マルチェナの手によって完成される一八一八年にはるかに先立って、カダルソが問題の書簡（七八番）の抄訳と、その一文一文に反駁のコメントを付した時期を、フランスから、あるいはヨーロッパ旅行からの帰国直後と考えると、まったく不自然ではない。

本論に先立ってスペインの地理と歴史についての梗概が添えられているが、これはのちに『モロッコ人の手紙』にも含まれることとなった。このほかにも、カダルソは人気を博した風刺小説『薫る賢人』の「補遺」（一七七二年）において軽佻浮薄な旅行者を笑いのめしているが、これもモンテスキューの作品にあらわれる、表層的な旅行者に対するあてこすりと解することができよう。つまり、カダルソという作家の後半生において、『ペルシア人の手紙』への不満に端を欲した反駁とその文学作品への昇華という一連の反応が重要な位置を占めているのである。

問題となっている『ペルシア人の手紙』七八番の書簡は「スペインにいるあるフランス人がこちらへ書き送ってきた手紙の写し」であり、そこには、「半年前から」スペインとポルトガルを歩きまわっているというフランス人による軽侮と揶揄を含んだ隣国の観察が展開されている。これに対するカダルソの反駁（注釈として付される）を見てみよう。

---

<sup>4</sup> Cadalso, José de. *Defensa de la nación española contra la "Carta Persiana LXXVIII" de Montesquieu*. Ed. Guy Mercadier. Toulouse: France-Iberie Recherche, Université de Toulouse, 1970. pág. 5.

### テキストの翻訳

半年前からわたしはスペインとポルトガルを歩き回り、他国民はすべて軽蔑しながら、フランス人だけは憎悪するという名誉をもって遇してくれている国民のあいだで暮らしています。

### 第二の注釈

この言論の冒頭こそわれらが審判の軽薄さを証明する。たった六ヶ月でこれらの不幸な国々について大学者よろしく高説を垂れようとは。エル・エスコリアルを見るのでさえ、もっとおおくの時間が必要だ。カスティーリャ人とポルトガル人を混同しているというまさにその事実が、われらの厳格な批評家の浅薄を教えている<sup>5</sup>。

この後、モンテスキューのテキストでは、スペイン人（ここではカスティーリャ人）に特有とされる怠惰や虚栄心、恋愛への性向、宗教裁判、学問における後進性がわずかな紙幅で矢継ぎ早に展開される。文体の軽妙洒脱からして、真剣かつ重要なスペイン批判であるとは考えられない。なかにはほかの書簡でも取りあげられる同国の異端審問所への批判も含まれ、『ペルシア人の手紙』全体をつうじての体系だった批判をも予期させる内容といえるが、旅行者の目をつうじて異国の文物を面白おかしく、あるいはときに理性的に観察、批評するというこの作品特有の記述と違って差し支えない（ただしこの場合の観察者はペルシア人ではなくフランス人なのだが）<sup>6</sup>。これに対してカダルソは極めて真剣な筆致で反駁を試みており、後年の作品にみられる彼一流のユーモアもここにはない。『擁護』をカダルソの若書きの作品と考えるゆえんである。

さきに『モロッコ人の手紙』は『ペルシア人の手紙』に対するアンチテーゼとして書かれていると述べた。カダルソが上の引用のように審判の軽薄さを批判するのであれば、カダルソの『モロッコ人の手紙』はそれをどのように超克するのか。そのことを作品テキストのうちに跡づけてみよう。作者の用意した周到な戦略が、書簡体小説というジャンルにおける『モロッコ人の手紙』の特異性を際立たせるはずである。

<sup>5</sup> Cadalso, José de. *Defensa de la nación española contra la "Carta Persiana LXXVIII" de Montesquieu*. Ed. Guy Mercadier. Toulouse: France-Iberie Recherche, Université de Toulouse, 1970. pág. 14.

<sup>6</sup> なおこの作品におけるスペインへの言及はこれが唯一無二のものではない。しかし一通の書簡を丸ごとひとつつそれに捧げたものは他にない。

### 3. 『モロッコ人の手紙』

カダルソのもっとも長大な作品である『モロッコ人の手紙』は、一七七四年に出版の許可の申請がされたが、認められず一七七八年に返却されている。作者自身の言によれば<sup>7</sup>、軍務によるサラマンカ滞在中、すなわち一七七三年から翌年にかけて完成したとみられるが、作中の言及から古くは一七六八年ごろに執筆が開始されたと思われる部分がある。またいっぽうで、草稿を引き取ったのちにカダルソが加筆修正を施したと思しい箇所もある。『モロッコ人の手紙』が、カダルソの長いとはいえない生涯の後半においてもっとも重要な作品であり、作者自身その出版におおいに意欲を持っていたことは、彼が友人に宛てた書簡などからうかがい知ることが出来る。

全体で九〇の書簡よりなる本作品で手紙をやり取りするのは、モロッコの大使の随行人員としてスペインをおとずれ、そこに留まることを得たガセル、彼を教えみちびき、その面倒をみるスペイン人ヌーニョ・ヌーニェス、祖国にいるガセルの師ベン・ベレイの三人の人物である。数十人のペルシア人が手紙をやりとりするモンテスキューの作品に比して、手紙の書き手はきわめて少ない。また、モンテスキューのみならず同時代の、異邦人の目を借りた書簡体小説とは異なる点として、そのやり取りにおいて当の国の人間、すなわちスペイン人の書き手が含まれていることは特筆にあたいしよう。一八世紀スペイン研究の泰斗ラッセル・P・シーボルトはつぎのように指摘している。

外国を旅する旅行者の手紙はある程度の距離と客観性を示唆するが、見慣れたものに囲まれて自分自身の国に暮らす人間の手紙は国の問題との個人的な同一化を意味する。スペイン人の明敏な手紙の書き手ヌーニョ・ヌーニェスに匹敵する人物は、ほかの国々の「東洋人の」手紙の中には見出されない。モンテスキューの『ペルシア人の手紙』にフランス人の手紙の書き手はなく、ゴールドスミスの『世界市民』にイギリス人の書き手はいない<sup>8</sup>。

ヌーニョにとって、作品の中のスペインは彼自身の祖国の話題である。いっぽうに客観的な外国人の視線を置き、他方に当事者としてのスペイン人のまなざしが置かれている。そもそも、完全なる他者としての異邦人を想定することはあまりに無邪気な態度である。未知のものに出

<sup>7</sup> Cadalso, José de. *Escritos autobiográficos y epistolario*. Ed. Nigel Glendinning y Nicole Harrison. London: Tamesis, 1979. pág. 23.

<sup>8</sup> Sebold, Russell P. *Cadalso: el primer romántico "europeo" de España*. Madrid: Gredos, 1974. pág. 223.



会って、これについて正確な判断を下すことがはたして可能であるのか。それは先行する作品群についてもひとしく批判できよう。それが不可能であることがまさに贗の異邦人をかたった書簡体小説というジャンルの妙味、醍醐味であるとすれば、カダルソの作品はそれらとはおおいに異なっているといわざるを得ない。

第一に、異邦人はけっして遠い場所から訪れるわけではない。文字通り目と鼻の先に位置するモロッコは、スペインにとってもっとも近い異邦である。ペルシア人、トルコ人、あるいは中国人の旅行者を想定することの不自然さは、作者自身が序文に述べている。

そのような作品を帰すべき旅人の数が少ないことから、スペインにおいてこの手の書き物はそれほど自然なものではない。ピレネーのこちら側にあって書かれた『ペルシア人の手紙』、『トルコ人の手紙』、はたまた『支那人の手紙』という標題は信憑性を欠くだろう<sup>9</sup>。

第二に、スペインに滞在し、その観察や意見を書き送るガセルの造形もまた異邦から訪れるほかの旅行者たちとは趣をことにしている。ガセルはスペインを訪れる以前にイギリス、フランスその他のヨーロッパの国々を旅行したことがあり（それは作家自身が訪れた国々でもある）、異なる宗教の文化を知らぬわけではない。また、スペイン語を完全に理解する人物とされている（「わたしはこれらキリスト教徒のような身なりをし、彼らの家に多く出入りし、その言語を解し<sup>10</sup>」）。異国の珍しい文物について面白おかしく書き綴るというスタイルは、カダルソの作品では完全に廃されている。ベン・ベレイに宛てた第一の手紙で、ガセルはスペイン滞在の目的を次のように綴る。

わたしの望むところは、有益な旅をすることであり、この目的は王侯貴族の方々の随行員としてでは必ずしも果たしうるところではありません。アジア人やアフリカ人であればなおさらのことです。こういってよければ、こうした方々は通り過ぎる土地の表面しか目にしないのです。その絢爛ぶり、知るに値する物事を深く追求する契機となる経緯<sup>いきざつ</sup>の不在、召使たちの数、言語を知らぬこと、行く先々の国で奇異のまなごしを向けられずにはおられぬこと、そしてそのほかの理由が、人目をひくことなく旅する一般のものには与えられている多くの手段を彼らには妨げるのです<sup>11</sup>。

<sup>9</sup> カダルソ、ホセ・デ『モロッコ人の手紙／鬱夜』富田広樹訳、現代企画室、二〇一七年、八頁。

<sup>10</sup> カダルソ、ホセ・デ『モロッコ人の手紙／鬱夜』富田広樹訳、現代企画室、二〇一七年、一四頁。

<sup>11</sup> カダルソ、ホセ・デ『モロッコ人の手紙／鬱夜』富田広樹訳、現代企画室、二〇一七年、一四頁。

つづく第二の手紙でガセルは、「旅をしている国についての真の理解に到達するのにどれほどのことが必要とされるかご存じでしょうか。」(『モロッコ人の手紙』16)と述べた上で、スペインの歴史の研究に着手したことを故郷の師に伝えおくる。そして第三の手紙が書かれるのは、その作業が完了した数ヶ月後のこととされているのである。この第三の手紙において、『擁護』にあったスペイン史の梗概がふたたびあらわれる。驚くべきことには、この梗概は数ヶ月におよんだ研究の末にガセルが書きあげたものではないのである。

わたしは友人であるヌーニョにそれを依頼し、あなたにそれをお送りすることにいたします。国の歴史の梗概が彼の手になるものであるからといって、お国びいきで歪められていようのご心配には及びません。というのも、賞賛と情愛に値するものとして彼がその祖国を愛し、崇めているとはいえ、地球上のこの地域、あるいはその裏側や、どこぞの国に生まれ落ちることは偶然の所産に過ぎない、と彼が口にするのを何度となく耳にしているからです<sup>12</sup>。

ガセルはスペイン史の梗概を執筆することをヌーニョに依頼し、その内容が自身の見解と合致することを確認したうえでベン・ベレイにそれを送っている。この奇妙な操作によって達成されているのは、たとえ厳密な調査研究に基づくものであれ、一介の外国人に過ぎないガセルが先入見や誤謬に満ちた歴史の梗概を認めることのないようにする予防策である。

同様の周到さは、作品における話題の取り上げ方にも共通して見られる。特定の話題が繰り返しかえしあらわれることは、モンテスキューの作品においてもけっして皆無ではないが、その数は限られている。基本的にはいずれの書簡もが、それ自体で完結した話題をとり扱っている。しかしカダルソの作品においては、ある手紙の内容に別の書き手が返事を認め、これについての議論を深めることがしばしばみられる。スペインにおける親子間の訴訟や国民の性質、死後の名声や昔日のスペイン、隠遁生活をめぐって書簡は往還する。また、ガセルが書きおくれた話題についてその内容に驚いたベン・ベレイが、別途ヌーニョにその内容の真偽とガセルの物事の理解について確認をするケースもみられる(後述)。こうして、三者が三様の意見を持ち、ときには異なる価値観に立って議論をすることにくわえて、各登場人物のそれぞれがおかれている状況が生み出す共通点と相違点が、物事を異なる視点で観察させる機能を持っている。すなわち、ガセルとヌーニョはスペインにいて、じっさいの事物を目の前にしながら批評をすることが出来る。これに対し、ベン・ベレイのスペインにかんする知識はすべてが伝聞によって

<sup>12</sup> カダルソ、ホセ・デ『モロッコ人の手紙／鬱夜』富田広樹訳、現代企画室、二〇一七年、一八頁。

いる。ガセルとベン・ベレイはモロッコ人としてスペインを見、ヌーニョはスペイン人として祖国を見る。またベン・ベレイとヌーニョはともに深い知識と成熟した考え方を持っているのに対して、ガセルは若者に過ぎない。「声の複数性は「ドグマ的になることを避け、批評が弁証法的になること」を目的とする」とはドロレス・トロンコース・ドゥランの指摘である<sup>13</sup>。

カダルソは『ペルシア人の手紙』の中でなされているスペインに対する批判が、たった半年スペインに過ごしただけのフランス人の旅行者によってなされることに憤りを憶えた。ガセルがスペインに住み、スペイン人ヌーニョに意見を求めながら理解を深めていくという結構で、カダルソはモンテスキューの作品との差異化を果たそうとしている。つまり、外国人としてスペインを外側から見た視線と、スペイン人としてスペインの問題に無関心ではいられない内側からの視線が交錯することで、批評行為そのものの客観性が増すのである。さらには、スペインにいるスペイン人（ヌーニョ）、スペインにいるモロッコ人（ガセル）、モロッコにいるモロッコ人（ベン・ベレイ）、それぞれの登場人物のスペインとの距離が、スペインについての理解を多重化する。不偏不党がこの作品の肝であることは、その目的とともにカダルソ自身の言葉でつぎのように表明されている。

これらの書簡は今日の、そしてかつてそうであった国民の性格を扱っている。この批評がある人たちの気に入るようにするには、その国民を貶め、罵詈雑言で満たすとともに、月並みの美点さえもそこには見出せないというようにする必要があろう。また別の人たちを喜ばせるには、おなじように、その気質を調べてわかったことのすべてを誉め上げ、それ自体にあっては非難に値するべきものもことごとく称揚する必要がある。このふたつのやり方のうちのいずれであれ、『モロッコ人の手紙』がそれに従うのであれば、多くの愛読者を獲得したであろう。ある人々に悪く思われるのとひきかえに作者は、そのほかの人たちに愛されたであろう。しかし、これらの書簡を支配する公平の精神にあっては、そのふたつの極からの憎悪を結び合わせずにはおかない。みずからの理性を用立てたいと願う人間は、この中庸をこそ追求せねばならないというのは真実である<sup>14</sup>。

とはいえ、手法によってどれほど客観性を高めたとしても、ここで追求されているのは、唯一無二のスペイン像ではない。そうではなく、客観性と公平性を旨とする議論の場としての、国民の批評なのである。スペインについて考え、意見を交わすそのこと自体が、『モロッコ人

<sup>13</sup> Troncoso Durán, Dolores. "La polifonía y las *Cartas marruecas* de Cadalso." *Cuadernos de estudios del siglo XVIII*. Núm. I (1991). pág. 48.

<sup>14</sup> カダルソ、ホセ・デ『モロッコ人の手紙／鬱夜』富田広樹訳、現代企画室、二〇一七年、一二頁。

の手紙』という作品全体を用いての壮大な実験であり実践となっているのである。

#### 4. ちょうど真ん中の海

地中海とはけだし名訳である。ユーラシア大陸とアフリカ大陸に囲まれた、文字通り大地の中の海である。スペイン南端のジブラルタル海峡は、晴れた日には対岸を望むことができる。それでも、ふたつの岸のあいだに横たわる水は歴とした地中海である。『モロッコ人の手紙』は、この海を往還した一群の書簡という体裁を持つ。

作品の正式なタイトルは、「序文」によれば『ガセル・ベン・アリなるモーロ人が新旧のスペイン人の風俗習慣についてその友人のベン・ベレイに宛てた手紙、ベン・ベレイからのいくつかの返事、ならびにこれらに関係するその他の手紙』とされている<sup>15</sup>。それぞれの書簡は日付を持たず、ただ発信者と受信者の名が記されたのちに手紙の内容が続く。手紙の大半はスペインのガセルから祖国にある師ベン・ベレイに宛てられたものだが、仔細に検討するとすべての登場人物が相互にやり取りをしていることがわかる。このなかで注目にあたいるのは、ヌーニョとベン・ベレイが直接に交換する手紙の数である。ヌーニョからベン・ベレイにあてては四通、ベン・ベレイからヌーニョに三通の手紙が書かれている。これらの人物の、作品全体をつうじての書簡数がヌーニョ一〇通、ベン・ベレイ一通にすぎないことを考えれば、ガセルを抜きにして故国の師とスペインにおける後見人が送りあう手紙の数はけっしてすくなくない。これらの書簡でヌーニョとベン・ベレイはなにを語りあっているのだろうか。

『モロッコ人の手紙』における書簡の発信者と受信者の内訳

		受信者		
		ガセル	ヌーニョ	ベン・ベレイ
発信者	ガセル		三	六六
	ヌーニョ	六		四
	ベン・ベレイ	八	三	

両者が交換した手紙は第二〇番(ベン・ベレイからヌーニョへ)、第二一番(ヌーニョからベン・ベレイへ)、第四二番(ヌーニョからベン・ベレイへ)、第四六番(ベン・ベレイからヌーニョへ)、第四七番(ヌーニョからベン・ベレイへ)、第四八番(ヌーニョからベン・ベレイへ)、第六二

<sup>15</sup> カダルソ、ホセ・デ『モロッコ人の手紙／鬱夜』富田広樹訳、現代企画室、二〇一七年、九頁。

番（ベン・ベレイから、ヌーニョへ）。これらはかならずしも時系列に沿っているわけではない。二一番、四八番の手紙は直前のものに対する返事となっているが、いっぽうで六二番のそれが四二番の手紙に対する返信となっている。これらの手紙においてどのようなことが取り上げられているかをみていこう。

第二〇番の手紙では、ガセルの師であるベン・ベレイよりスペインのヌーニョに感謝が伝えられるいっぽうで、ガセルの手紙の「検閲」ともいえるようなチェックを彼に依頼している。

ガセルがあなたの国を旅し、あなたの助言を受けて賦性の才能を開花させていること、この上ない喜びをもって見ております。あなたのご指導がなければ彼の物事の理解はあれにとって有益であるどころか、あれを惑わすばかりであったでしょう。〔中略〕彼の書いたことのいくつかはそれ自体において相容れないのです。時に彼の若さが彼を欺き、物事をそのあるかたちではなく、彼にとってそう思われるものとしてわたしに描いてみせているのではないかと<sup>おそ</sup>われるのです。彼の送る手紙をあなたにお見せするようにしてください、彼がわたしに出来事を正確に書いているのか、それとも彼の思い込みを書いているのかが分かるように<sup>16</sup>。

これに対するヌーニョの返信はベン・ベレイの心配を払拭する。

ガセルの手紙からあなたがお考えになったような状態にわたしの国があるとは思えませんし、彼自身によればそれはマドリードやほかの大きな都市の風俗の観察から導き出したものです。彼が地方で目にするものをあなたに書き送るようにさせなさい<sup>17</sup>。

ヌーニョがガセルの手紙の内容を確認しているかはさだかではないが、すくなくともその内容について把握しており、さらなる報告をさせるよう促している（なおヌーニョがガセルの手紙に目を通しては第四八番の手紙で明らかになる）。ここでのやり取りはカダルソが心を砕いた、より公平な批評を実践するための仕掛けのひとつといえるだろう。

しかし、第四二番以降突如として頻繁になる両者の交信は（第六二番の手紙がこれへの返信であることを考えれば、なおのこと）、べつの様相を呈する。第四二番の手紙を「ガセルから聞くところによって、あなたがアフリカに住まう誠実な人であることを知っておりますし、彼

<sup>16</sup> カダルソ、ホセ・デ『モロッコ人の手紙／鬱夜』富田広樹訳、現代企画室、二〇一七年、七五頁。

<sup>17</sup> カダルソ、ホセ・デ『モロッコ人の手紙／鬱夜』富田広樹訳、現代企画室、二〇一七年、七七頁。

が告げるところによって、あなたにはわたしがヨーロッパに住まう誠実な人間であることを御存じいただいていることでしょう<sup>18</sup>」と書き出したヌーニョは、つぎのようにこの書簡を締めくくる。

わたしたちが神と呼び、あなた方がアラーと呼ぶ至上の存在、つまりアフリカとヨーロッパとアメリカとアジアを創った方が、長きにわたって、そしてわたしが望むようにあなたを、アメリカの民を、アフリカの民を、アジアの民を、そしてヨーロッパの民をお守りくださいますように<sup>19</sup>。

これに対する直接の返信である第六二番の手紙、ベン・ベレイがヌーニョに宛てた最後の手紙で、モロッコの老人はつぎのように返信する。

先ほど受け取ったあなたの手紙は、ガセルがあなたについて何度となく書き知らせてきたことが真実であることをわたしに証明してくれました。あなたがたのあいだに誠実な人間があろうことをわたしは疑ったことはありません。誠実と正直があればやこれの風土に特有のものであると考えたことはありません<sup>20</sup>。

この手紙は「アラーがあなたをお守りくださいますように<sup>21</sup>」と結ばれている。第四二番の手紙の結びと対称的であることは一目して瞭然だろう。これらの交信において、直接の面識を持たないふたりは、互いを認め合い、それぞれの文化的背景をはなれてより普遍的な倫理的価値を称賛しているのである。ふたりがやり取りするこのほかの書簡において、幾度となく繰り返されるのは「誠実な人間 (hombre de bien)」という理想だが、それは序文の末尾に編者であるところの作者がみずからをそう呼んだものでもある。

そしてわたしは心のうちでこう言うだろう。「わたしは誠実な人間以上のなものでもないのだ、国民の批評というこの世界における最も繊細な主題にかんして、わたしには公平と思われる文書を世に送り出しただけなのだ」と<sup>22</sup>。

<sup>18</sup> カダルソ、ホセ・デ『モロッコ人の手紙／鬱夜』富田広樹訳、現代企画室、二〇一七年、一二八―一二九頁。

<sup>19</sup> カダルソ、ホセ・デ『モロッコ人の手紙／鬱夜』富田広樹訳、現代企画室、二〇一七年、一三〇―一三一頁。

<sup>20</sup> カダルソ、ホセ・デ『モロッコ人の手紙／鬱夜』富田広樹訳、現代企画室、二〇一七年、一七〇頁。

<sup>21</sup> カダルソ、ホセ・デ『モロッコ人の手紙／鬱夜』富田広樹訳、現代企画室、二〇一七年、一七〇頁。

<sup>22</sup> カダルソ、ホセ・デ『モロッコ人の手紙／鬱夜』富田広樹訳、現代企画室、二〇一七年、一三頁。



これを啓蒙主義の時代に特有の、口先ばかりの理想と批判することはできる。しかし、そうした理想を展開する場としてジブラルタル海峡が選択されたことにはおおいに意味がある。

じつは『モロッコ人の手紙』のガセルには現実のモデルが存在する。一七六六年モロッコ大使としてマドリッドを訪問したアル・ガッザール (Abú-l-Abbás Ahmad Ibn al-Mahdi al-Gazzal al-Andalusi) は、スペインの新聞ではエル・ガセル (El Gazel) と紹介された。



アントニオ・ゴンサレス・ベラスケスの下絵にもとづくマヌエル・サルバドール・カルモナの版画『モロッコの大使』（一七六六年）（スペイン国立図書館蔵 Dib/14/3/85）

一七五七年よりはじまるモハメッド三世 (Mohammed ben Abdel-lah al-Jatib) の治世下、モロッコはおおくの欧州列強と通商協定を結んだ。スペインとの修好通商条約は一七六七年に結ばれている。一七七七年に世界で最初に主権国家としてアメリカ合衆国を認めたのも、彼が治める時代のモロッコであった。開明的なスルタンの同時代、スペインでは啓蒙専制君主として評価の高いカルロス三世が即位した（一七五九年）。エル・ガセルのマドリッド訪問はそのような時代の出来事であった。両国の友好関係は一七七四年のモロッコによるメリリャ包囲で破られるが、ひとたびは歩み寄る二者のあいだに横たわる海としてジブラルタル海峡があったのだ。

一七七四年二月、カダルソは『モロッコ人の手紙』の出版許可を得るため、王立言語アカデミアに査読を依頼する。アカデミアは作品の内容に概ね肯定的な評価を与え、カステイーリヤ会議に対してつぎのように回答した。

ドン・ホセ・バスケス〔カダルソの筆名〕によって執筆され、〔カステイーリヤ〕会議よりその検閲のために送られた『モロッコ人の手紙』はスペイン・アカデミアにおいて査読された。アカデミアは、作品の中でなされているスペイン人の新旧の習慣についての批評は、最近の習慣に入り込んだ様々の悪弊をあらためるのに役立つと考える<sup>23</sup>。

アカデミアの肯定的な評価にもよらず、出版許可は与えられなかった。アカデミアの査読ののち、カステイーリヤ会議は同年九月に始まったモロッコとの戦争を懸念し、同作中のアフリカの要塞に関する箇所について軍に査読を依頼する。戦略的な配慮によるものであったのだろうが、一巻の小説にすぎない『モロッコ人の手紙』のなかにそうした記述はいっさい見当たらない。翌年三月には特に問題はないものと判断が下されている<sup>24</sup>。それにもかかわらず、出版許可は得られなかった。

カダルソの落胆は深かった。友人トマス・デ・イリアルテに宛てた手紙に彼は書いている。

マドリードを後にするのが今回ほど辛かったことはありません。なぜならわたしはおおきな願い、つまり退役の交渉をすることと、そしてわたしの存在なくしては決してわたしが望むようには世に出ることのない作品の出版を目論んでいたのですから<sup>25</sup>。

悲しいかな、現実世界の大使訪問からカダルソが『モロッコ人の手紙』の執筆を終えるまでのわずか数年のうちに、ちょうど真ん中の海は不偏不党にして誠実な人間同士が中庸の理想を語りあうことのできる場所ではなくなっていたのである。

---

<sup>23</sup> Glendinning, Nigel. "New light on the circulation of Cadalso's *Cartas marruecas* before its first printing." *Hispanic Review*. T. XXVIII (1960). pág. 137.

<sup>24</sup> Glendinning, Nigel. "New light on the circulation of Cadalso's *Cartas marruecas* before its first printing." *Hispanic Review*. T. XXVIII (1960). pág. 137.

<sup>25</sup> Cadalso, José de. *Escritos autobiográficos y epistolario*. Ed. Nigel Glendinning y Nicole Harrison. London: Tamesis, 1979. pág. 93.



参考文献

- Baquero Goyanes, Mariano. “Perspectivismo y crítica en Cadalso, Larra y Mesonero Romanos.” *Clavileño*. T. X (1954). págs. 1-12.
- Boudchar, Mohamed Reda. “España vista por un embajador marroquí del siglo XVIII: Ibn ‘Utmān al-Maknāsī.” *Norba*. Vol. XXIX-XXX (2016-2017). págs. 45-56.
- Cadalso, José de. *Defensa de la nación española contra la “Carta Persiana LXXVIII” de Montesquieu*. Ed. Guy Mercadier. Toulouse: France-Iberie Recherche, Université de Toulouse, 1970.
- . *Escritos autobiográficos y epistolario*. Ed. Nigel Glendinning y Nicole Harrison. London: Támesis, 1979.
- Feria García, Manuel C. “El tratado hispano-marroquí de amistad y comercio de 1767 en el punto de mira del traductor (I). Contextualización histórica: encuentro y desencuentros.” *Sendebār*. T. XVI (2005). págs. 3-26.
- Glendinning, Nigel. “New light on the circulation of Cadalso’s *Cartas marruecas* before its first printing.” *Hispanic Review*. T. XXVIII (1960). págs. 136-49.
- Sebold, Russell P. *Cadalso: el primer romántico “europeo” de España*. Madrid: Gredos, 1974.
- Troncoso Durán, Dolores. “La polifonía y las *Cartas marruecas* de Cadalso.” *Cuadernos de estudios del siglo XVIII*. Núm. I (1991). págs. 43-55.
- 『聖書 新改訳』日本聖書刊行会、一九七〇年。
- カダルソ、ホセ・デ『モロッコ人の手紙／鬱夜』富田広樹訳、現代企画室、二〇一七年。
- 永川玲二『アンダルシア風土記』岩波書店、一九九九年。
- ブルフィンチ、『ギリシア・ローマ神話 付録インド・北欧神話』野上弥生子訳、岩波文庫、一九七八年。
- マリーアス、フリアン『裸眼のスペイン』西澤龍生、竹田篤司訳、論創社、一九九二年。

